日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

Linguistic politeness in Japanese : the institutionalized use and the progmatic use

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 因, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/430

日本語のポライトネス

— その制度的側面と語用論側面 —

九州大学 留学生センター　因　京子

キーワード：ポジティブ／ネガティブ・ポライトネス、制度的使用／語用論的使用、敬語、授受の補助動詞、話者指向的／他者指向的、親和的意図／対立的意図

1. はじめに

本研究の目的は、日本語教育において語用論的運用力を訓練する方法を考案することを最終目標として、代表的な語用論的課題であるポライトネスについて、その制度的側面と語用論的側面との関係と、ポライトネスが表現される機序における文法的言語装置の役割を整理してみることである。本稿の主張は次の3点である。第一に、日本語のポライトネス表現の特徴として、Brown & Levinson(1987)のいう二つのフェイスそれぞれに対応する制度化された表現方法が存在すると見ることができること、第二に、制度的使用と語用論的使用は截然と区別されるものではなく、連続的なものと見ることができること、第三は、言語装置が文脈において発揮する意味（本稿では、「効果」と呼ぶ）は固定しているのではなく、その装置の基本的意味が、文脈的要素－とりわけ、話者の意図が親和的か対立的か、話者指向的か他者指向的か－と作用した結果として産生されるということである。

慣用的に用いられる制度的表現であっても、その効果は常に固定しているのではなく文脈の中で解釈されるべきもので、解釈の過程

は無秩序でも独特でもなく常識的な論理に基づいている。このことを確認しておくことは、語用論的運用には柔軟性と論理性が欠かすことのできないものであることを示すという点で、日本語教育において重要な意味がある。

以下、2節で本研究の背景、特に、Brown & Levinson(1987)の理論との関わりについて述べ、3節で日本語の「ネガティブ・ポライトネス」について、4節では「ポジティブ・ポライトネス」について整理を行なう。特に、授受動詞の補助動詞としての用法を「ポジティブ・ポライトネス」の制度的側面、即ち、「ネガティブ・ポライトネス」における敬語に相当するものとして捉えられることを示す。5節ではそれまでの議論に基づいて日本語のポライトネスの特徴をまとめ、最後に6節で日本語教育への応用について述べる。

2. 本研究の背景

外国語教育における最終的な課題の一つは、認知的な意味の解析や生成だけでなく、ポライトネスなどの語用論的効果を的確に解釈し且つ産生することができる運用力を養成することである。語用論的効果を産生するためには、どの言語でも、構文・語彙・音調・内容など様々なレベルでの操作が行なわれ、日本語もその例外ではないが、日本語には更に、丁寧体・普通体の区別、尊敬語・謙譲語・丁寧語などの敬語、ジェンダー標示表現、補助動詞など、認知的意味の生成には直接関わらない言語装置が数々あって、語用論的効果の産生に寄与する。語用論的運用力を伸ばすには、こうした言語装置についての十分な理解を促すことが必須であるが、現行の教授法の中では、これらの言語装置が文脈で示す「意味」が、認知的・構造的な意味とは違って、基本的な概念が語用論的に解釈された結果としての「効果」であ

ることが考慮されているとは言い難く、その意味するところが常に一定であるかのような提示が行なわれたり、いくつかの可能性が並列して提示されたりするに留まっており、学習者に誤解や混乱を与える結果となっている（因 2002、2004b, 2005a）。学習者はよく「敬語が難しい」と訴えるが、これは敬語の形式操作の難しさなどに言及したものではなく、敬語を場に応じて使い分けることを含めて語用論的適切性を実現すること一般に伴う難しさを端的に表現したものと見るべきであろう。日本語の持つ言語装置の持つ基本的機能を明確にし、且つ、それが効果を生み出す機序を常識的推論によって解釈される論理性のあるものとして提示することは、語用論的運用力養成の基盤をなすもので、日本語教育にとって重要な課題である。

ポライトネスの実現は、代表的な語用論的課題であり、日本語は、その実現に深く関与する敬語という言語装置を有する。しかし、これが常に「話者の対象に対する丁寧さ」を示すわけではないことを母語話者なら皆知っている。また、他の言語においても行なわれるように、内容、構造、音調などの面でもポライトネス実現のための調整が行なわれる。日本語のポライトネスは、他の言語と共通する方法や日本語の持つ言語装置を利用する方法によって日本の文化的価値観の中で実現されるが、その基本的概念や機序は、言語や人間の普遍的な面と関連している。

ポライトネスに関する理論として最も代表的なものは、Goffman(1967)のフェイスという概念を応用したBrown&Levionson(1987)である。この理論に対しては、話者の自由意志でなく社会的要因によってその使用が制御される敬語を持つ言語には当てはまらないという批判があり（Ide 1989, Matsumoto 1988, 松村 1999など）、筆者もそのような立場から分析を行なったことがある（松村・因 2000）。しかしここには、宇佐美（2002）や滝浦（2005）が指摘するように、ポライトネス理論をもっぱら能動的な方略の理論と受け取るという誤解があったと認めざるを得ない。Brown&Levinson(1987)はそれぞれの言語のポラ

イトな言語現象についての具体的な説明というより、ポライトネスを志向する動機と効果を生み出す過程に関与する原則について一般的理論を提示したものである。ポジティブ、ネガティブの二つのフェイスがどのような感情と結びついているか、どちらのフェイスがどの程度重視されるか、また、フェイスを保護したりフェイスに働きかけたりする際にどのような手段がどのように用いられるかなどについて、各言語は当然個別の傾向や特徴を持っているのであり、そのことは、動機となる要素と効果産生に寄与する原則にある程度の普遍性があることと矛盾しない。

本研究では、日本語のポライトネスはBrown&Levinson(1987)の提案した二つのフェイス、即ち、自分の領域を尊重され行動の自由を保持したいという欲求（「ネガティブ・フェイス」）と他者からの評価や受容を受けたいという欲求（「ポジティブ・フェイス」）への対応を志向すると考える立場を取る。また、彼らの提案した「ストラテジー」は、そのまま日本語に適用できるわけではないが、日本語においても有効と見なせるものを多く含んでいると考える。しかしながら、既に述べたように、それぞれの言語の中でどのような感情が優先されどのような「ストラテジー」が優位となるか、更に、具体的にどのような言語的手段が選択されるかは、それぞれの言語の特徴と文化との結びつきの中で独特の様相を呈する。日本語のポライトネスの実現機序を具体的に記述することは、未だ課題として残されている。

日本語のポライトネスの大きな特徴と言われてきたのは、「敬語」という、社会的にその使用が動機付けられる制度的言語使用の存在である。敬語がネガティブ・フェイスへの対応を制度化したものであるという点は夙に指摘されているが、本研究では、ポジティブ・フェイスに関しても儀礼的言語使用が制度化されているという見解を提出する。また、儀礼的使用であってもそこに反映されるものは一様で固定したものではなく解釈を行う余地があること、制度的に用いられるのと同じ言語装置が専ら話者の能動的意図に基づいて用いられる場合も

あることを確認する。

本研究で用いる基本的な概念と用語について述べる。対面的相互行為における人間の普遍的要求に言及するものとしてBrown&Levinson(1987)が用いた「ポジティブ・フェイス」「ネガティブ・フェイス」という概念を使用し、それらの保護や働きかけを目的とする言語使用を「ポジティブ／ネガティブ・ポライトネス」と総称する。「ポジティブ／ネガティブ・ポライトネス」は、制度化された儀礼的側面と話者の能動的な選択による語用論的側面の両方を含むと考える。また、ポライトネスを表現するために取られる選択を制御する方針は、これが抽象的なものであって特定の手段を指定するものではないことを明示するために、「ストラテジー」と呼ぶことを避けて「原則」と呼ぶことにする。例えば、「対象との間に距離を取る」「間接的に示す」などは、「ネガティブ・ポライトネス」の実現に寄与する「原則」であり、具体的には「敬語」「不確実を示す文末表現」などの言語装置の使用によって実現されると考える。

3．日本語のネガティブ・ポライトネス

本節では、日本語のネガティブ・ポライトネス、特に、しばしば混乱の原因となってきた敬語をめぐるいくつかの論点について考察する。

3－1 敬語の基本的機能と儀礼化された使用

日本語のポライトネスに関連する議論の中で主要な位置を占めてきたのは、何といっても「敬語」である。「敬語」は、名称から単純に考えれば話者の対象に対する「敬意」という感情の表れのようであり、日本語教育においてもそのように提示されてきた。そのた

め、日本語学習者は、上級者と呼ばれる段階に達していても、しばしば「敬語の使用＝相手への敬意の存在、敬語の不使用＝敬意の非存在、自己の優位性の認識」という見解を固持していて、それに基づいて解釈を行なう（因　2004b、2004c、2005a）。

改めて言うまでもなく、敬語使用は必ずしも純粋で率直な「敬意」が動機となっているわけではない。しかし、敬語使用の裏に「敬う気持」「恭しい態度」「謙譲の美徳」といった心性を見ようとする「＜敬意＞の敬語論」が明治以来脈々と受け継がれてきており、今日でもしばしば強力であることは、滝浦（2005）に詳しく述べられている。滝浦は、敬語に関する様々な議論を検証した上で、敬語使用が発話主体の＜敬意＞に発するとする見方には与せず、敬語を人間関係認識の表現装置と捉えており、「素材敬語」「対者敬語」「授受の補助動詞」の使用の機能を話者と対象との距離の調節であると考えている。

筆者は、「授受の補助動詞」の使用は距離の問題には還元できないと考える。このことは次節で改めて述べるが、少し先取りして言うと、授受の補助動詞の基本的機能は「対象を、恩恵を与える者、または与えられるほど好かれている者として描く」ことであって、人々に認められたい欲求への対応、即ち、ポジティブ・ポライトネスである。「上下（距離）」と「恩恵」の認識は同時に出現し絡み合って表現されることが多いため、両者の混同はしばしば見られる。例えば、謙譲の動詞形式「おVする」は「目上の人のために行なう自分の行為（恩恵提供）を示す」と言われてきた。しかし、この形式は基本的には恩恵の表示とは無関係であり、対象者への距離の認識を示すものである（因　1997）。「“恩”の関係が＜距離＞の関係に還元できる」と論じた滝浦の議論（2005：243－44）にも、二つの授受動詞の重用の効果を看過するなど、明らかな混乱が見られる。しかしながら、「上・下」「ウチ・ソト」「命題的・遂行的（または「話題・相手」、滝浦によれば、「素材・対者」）」、

「主格・体格」などの区別に関わらず、「敬語」の基本的機能を「対象を遠くに置く」という話者の認識、即ち「距離化」であるとまとめた滝浦の見解は、日本語の敬語の基本的機能を簡明に定義したものと評価できる。

日本語においては、特にFTAであるとは考えられない発話であっても、社会的上位者や「ソト」の人物に対しては距離化＝敬語使用を行なって、相手の領域を尊重する姿勢を見せることが制度化されている。「制度化」とは、それを行なうことがデフォールトであって、行なわないとしたら特別の効果が生じる程度にその使用が義務付けられているということである。制度化されている以上、「他者の領域への心からの配慮」は、あっても構わないが、なくても驚くにはあたらない。

制度的敬語使用がどんな「意味」を持つかは、それが使用されなかったときに明らかになる。社会的上位者や「ソト」の人物に関して敬語を用いなければ、話者の対象への意識と関連させて解釈すれば「儀礼の欠如」、主に話者自身の特性と関連させて見れば「品格の欠如」という文脈的意味（認知的意味と区別して「効果」と呼ぶ）が生まれる。このことを反対から眺めれば、距離のある対象に対して距離化＝敬語使用を行なう場合、その動機は、通常は殆ど意識されないものの、「社会的慣習に従って儀礼的であろうとする態度」と「自己の品格を示そうとする態度」との間で流動的であり、解釈の余地があるということになる。即ち、制度的表現には他者指向的な面と話者指向的・自己防衛的な面とが扇の両面のように存在し、「他者への礼儀」という面が形骸化していると感じられる程度が高い場合には、「自己の品格を示す」という面が強く感じられるのである。例えば、筆者の身近にはもうあまりないが、夫に対して「です・ます」を用いる妻がある。こうした言葉遣いに、学習者には「夫を上位者として扱うとは!」と驚く者があるが、日本語母語話者の多くは、「上品な（または、上品ぶった）奥さんだなあ」と思

うだけだろう。

3－2 敬語の語用論的使用

敬語は話者が尊重すべき対象者に示す「ネガティブ・ポライトネス」として制度化されているが、このことは、敬語使用が話者の認識や意図に関わらず自動的に義務付けられているとか、敬語使用の効果が固定的であることを意味するわけではない。話者は能動的意図に基づいて「敬語」という装置を使用したり、或いは使用を回避したりして、文脈の中で特定の効果を産出する。例えば、社会的位置に差のある二人が対話するとき、両者とも成人であれば互いに敬語を用いることは珍しいことではなく、典型的な制度的使用の例と言える。しかし上位者は、下位者をどのような存在として扱うかを選択することができるため、上位者の下位者に対する言葉遣いには、敬語を使用するにしてもしないにしても、何らかの能動的意図が反映していると見ることができる。また、普通体で話している中で、重要な決意を伝える発話や談話をしめくくる発話などが丁寧体になることがある。教育現場では「改まりを示す」などと説明されるが、これは、話者が相手に関する認識を「私的会話の相手＝近い存在」から「公的会話の相手＝距離を置くべき存在」に改めたということである。ここで変化したのは、実はそこで行なわれる活動によって規定される「場」の認識であるが、それを相手との距離の変化として言語に投影していると考えることができる。更に、対立的意図に基づいて過剰に敬語を使用することは、「慇懃無礼」という名でよく知られているが、能動的意図による語用論的使用の典型的な例である。

「敬語」という、その使用が制度化されている言語装置であっても、特定の効果（例えば、「話者の敬意の表出」）と自動的に結びついているわけではない。また、話者によってもデフォールト値は異なっているため、効果は文脈の中で個別に解釈されなければなら

ない。例えば次の会話における妻の発言は、この発話が行なわれた状況や普段彼女がどのように話しているかによって、いくつかの解釈の可能性がある。

(1) 夫「今度の日曜、ゴルフに行くことになっちゃって」
　　妻「そうですか。わかりました」

妻が普段から夫に丁寧体で話しているのであれば、夫の報告を了解したことを告げているだけだと考えられる。しかし、いつもは普通体で話しているのであれば、了解したことを伝えるには「そう。わかった」と言うであろうから、ここには日頃の話し方からの逸脱がある。逸脱を認知すれば、そこから推論が促される。敬語の基本的機能は「距離化」であるが、親和的意図の存在を前提すれば、「相手を上位者と見なして、あるいは、そうであるかのように見なして、領域を尊重している」、逆に、対立的な意図を前提すれば「相手を忌避しているため遠ざける」という解釈になる。後者であれば、文字通りには了解したことを告げているが実は不満なのだということが理解される。即ち、この敬語使用の効果は「相手への丁寧さを示す」ではなく「相手への拒絶感を示す」ということになる。しかしながら、この発話が仕事場で誰が他にも人がいるところで行なわれたとする。その場合には、場面の影響によって、妻が普段とは違う表現を選択することがあり得る。そうなると、妻の対者敬語使用は、少なくとも、①場を「公の場（＝私的関係を持ち込まない場）」と認識したことを示した[場の認識を投影した他者指向的意図に基づく制度的使用]、②上品さを演出した[自己指向的意図に基づく制度的使用]、③拒絶感を示した[対立的意図に基づく語用論的使用]と3通りに解釈できる。このように、効果は、場の要因とその話者のデフォールト値からの逸脱の有無に依存する。デフォールトを知るためには談話を考慮に入れることが必要であることは言うまでもない（宇佐美　2001a、2002）。

以上の議論で明らかなように、敬語の制度的使用と語用論的使用

は截然と区別されるものではなく、制度的使用の範囲の使用であっても、他者指向的か自己指向的か、そこにどのような意識が投影されているかによって効果は異なる。敬語使用の効果は、その文脈で個別に検証されるべきものである。

敬語という装置が「ネガティブ・フェイス」だけに関わるわけではないことも確認しておきたい。敬語の「使用」が「対象との距離化」を示すとすれば、その「使用回避」や「不使用」は「使用」との明瞭な対比があれば「対象への近接化」と解釈され、「ポジティブ・フェイス」への配慮となる。実際、会話の中では、「です・ます」を使用しないで普通体を用いたり、明示的に文末レベルを表示することを回避したりすることが相手への親密化の手段としてしばしば出現する（松村・因　2000）。但し、二つのフェイスは、ネガティブ・フェイスへの配慮の回避が自動的にポジティブ・フェイスへの配慮となる、或いは一方への配慮ともう一方への配慮が相容れないというような、相互排除的関係にはない。このことは、一まとまりの表現の中に両方のフェイスへの配慮が同時に存在し得ること、例えば、敬語を用いつつ冗談を言ったりすることができることや、上下の認識と恩恵の認識を同時に表示する語彙の存在などを思い起こせば明らかである。

3－3 素材敬語と対者敬語

本節では、日本語の敬語の種類を整理し、日本語学習者をしばしば混乱させる二つの問題について考えたい。一つは、（田中自身に対して）「田中さんもいらっしゃる？」「田中さんも来ます？」とはどちらがより丁寧なのかという疑問である。もう一つは、既に前節でいくらか触れたが、同じ場所で同じ人々が話しているときにでも「丁寧度」が変わるのはなぜかという疑問である。

これまで区別を行なわずに議論を進めてきたが、敬語と呼ばれているものにはいくつかの種類がある。伝統的には、下のように分類

されてきた。

（2）a. 尊敬語：文の主格の項を話者よりも社会的上位者として扱うことを示す。

「おVになる（お読みになる、お急ぎになる、など）」

「尊敬動詞（なさる、いらっしゃる、など）」

b. 謙譲語：文の主格以外の項を話者よりも社会的上位者として扱うことを示す。

「おVする（お待ちする、お送りする、など）」

「謙譲動詞（致す、参る、など）

c. 丁寧語：発話の相手を社会的上位者として扱うことを示す。

「丁寧体（～です、～ます）」

Harada(1976)は、その文が示す命題の中に上位者が存在する「尊敬語」と「謙譲語」を「命題的敬語」、命題には上位者が存在しない「丁寧語」を「遂行的敬語」と呼んで区別し、両者の基本的な違いを明らかにした。この区別については、「話題敬語」と「相手敬語」という名称も行なわれるが、ここでは、滝浦（2005）に倣って、「素材敬語」と「対者敬語」という名称を用いる。

素材敬語の敬意の対象者が2人称である場合には、その人物は「話題の人物」という3人称的な役割と「対話の相手」という二つの役割を持つことになる。素材敬語には、相手の社会的立場についての話者の認識が反映され、対者敬語には、対話の場における相手の位置についての話者の認識が反映される。2人称の人物が素材敬語の対象者である場合にはその人物にはこの2つの認識が重なっていることを理解すれば、次のような言葉遣いのニュアンスの違いも明らかになる。

（3）（田中に対して）

a. 田中さんも、いらっしゃいますか？

b. 田中さんも、いらっしゃる？

c. 田中さんも、来ますか？

d. 田中さんも、来る？

(3a) は対者敬語も素材敬語も使用しており、社会的にも上位者として遇し今現在の相手としても尊重していて、言語的丁寧度は最も高い。(3b) は、素材敬語は用いているが対者敬語は用いていない。これについては、一つの解釈としては、素材敬語によってネガティブ・ポライトネスを成立させると同時に、対者敬語の部分では、丁寧体不使用という脱距離化によってポジティブ・ポライトネスを成立させようとしていると見ることができる。例えば、インタビュー番組のベテラン司会者が年下のゲストにこうした言い方をするのをしばしば耳にするが、一方で相手をゲストとして立てながら、実はキャリアも年齢も自分の方が上であるため率先してポジティブ・ポライトネスを実現して、寛いだ感じを醸し出そうとしているのであろう（松村・因　2000）。これは、話者の根底的な意図が親和的であると前提した解釈である。話者に親和的な意図がないと前提とすれば、素材敬語によって相手を上位者であるかのように見做すことによって自己の品格を示す一方で、対者敬語不使用によって自分は相手に遠慮すべき位置にはないという認識を同時に示したと解釈できる。年配の女性などに時折見られる、少々高飛車な感じの物言いである。(3c) も、素材敬語と対者敬語の一方しか用いていない点では (3b) と同じでようあるが、素材敬語の不使用が相手を社会的上位者と見なしていないことを明白に示しているため、純粋の「敬意」が存在する余地はない。対者敬語の使用は儀礼を示したと考えられるが、そこにも解釈の余地があることは前節で述べた。(3d) は、親しい相手であればデフォールトの話し方である。親しくなければ、近い関係であるかのように扱うことによってポジティブ・ポライトネスを志向したものと解釈できるが（親和的意図の存在が前提）、単なる領域侵犯とも解釈できる（対立的意図の存在が前提)。

このように (3b)「いらっしゃる？」と (3c)「来ますか？」

は、同一の丁寧度スケールの上に並んでいてその程度を比べられるような性質のものではない。また、言語装置の効果は、根底にある話者の意図が親和的か対立的かによって異なる。これは、語用論的効果一般についてあてはまる。例えば、同じ発話でも、話者の根底的意図が親和的であるかそうでないかによって、「冗談」でも「あてこすり」でもあり得る。

更に、話者が生み出そうとしている効果と、相手が最終的に受け取る印象とは異なることもあるということも、語用論的効果に本質的に伴う側面として了解しておかなければならない。言うならば、illocutionary forceとperlocutionary forceとの差異である。ポライトネスに関連した例をあげると、筆者は何度か、洋品店などで、素材敬語を用いないばかりか対者敬語すら用いない店員に遭遇したことがある。店員に悪気はなくポジティブ・ポライトネスを志向しているらしいことは完全に理解できたが、筆者自身は好意的には受け取らなかった。しかし、店員がそうした言葉遣いをするのはそれを好意的に受容する客も多いからであろう。

素材敬語と対者敬語の区別は、同一談話内の同一話者によるスピーチレベル・シフトの現象を理解する上でも有用である。前節でも少し触れたが、普通体が基調となっている中に、丁寧体の発話が現れることがある。

（5）（母と幼い娘の会話）

千恵子：あ、お母さん、あれ、なーに。

母親：だめよ、チョコのついた手で。大事なものなのよ。お母さんが女学校に入学したとき買ってもらったお人形なのよ。

千恵子：お母さんのお人形なの？お母さんの？どうして、どうして？お母さん、大人じゃない。大人でもお人形がいるの？

母　親：あせらなくてもいいのよ。これ、千恵子にあげますよ。でも、大事にしてくれるという約束ができなくちゃだめ。

（山岸涼子『私の人形はよい人形』）

下線部における対者敬語の使用は、相手個人への認識に基づくものというより、由緒ある人形を譲るという行為にふさわしい「改まり」を示そうとしたもので、「場」が変化したというより、言葉によって変化させたと見ることもできる。その変化を、相手への距離の変化として表現していると見ることができる。同僚同士が会社の会議では丁寧体、会社帰りの飲み屋では普通体で話すという現象も、場への認識を相手への距離の認識に反映させたものである。基本的に、場への認識は「今・ここ」の認識に関わるため、素材敬語ではなく対者敬語の部分に反映される。

同一の談話内で話者が特定の語用論的意図に基づいて敬語を操作することもある。下の(5)と(6)の下線部の敬語使用は明らかに有標であり、特別の効果の産生が意図されている。

(5) (消防学校の同期生に)

こづえ：こーゆーものは、持ち込み禁止のはずよね。教官室に<u>届けさせて頂くわ</u>。

夏　子：お願い。見逃して・・・

こづえ：だめ。

夏　子：教官室にだけは・・・

こづえ：もってくわ。規律を守るのは消防吏員として最大の義務。それがイヤなら<u>お辞めになれば</u>？一生懸命やってるこっちとしては、あんたみたいな人がいるとムカつくのよね。

(逢坂みえこ『火消し屋小町』)

(6) (お互いに惹かれあっていたが恋人同士ではなかった女性「南」に、男性「瀬名」が初めて恋心を告白した場面で)

南：何言ってんの？何言ってんの、今さら。ひとのこと、お姉さんだとか、親戚のおばちゃんだとか、むちゃくちゃ言ってただじゃない。ワタシといると男と話してるみたいだって。

瀬名：そんなこと言ってないよ。

南　：言いましたね。

(北川悦吏子『ロングバケーション』、メイナード2001：91－92)

(5)では、この話者がこの相手に通常は用いない素材敬語が途中で出現しているが、能動的な対立的意図に基づく有標の使用で、典型的な慇懃無礼の例である。(6)の対者敬語も対立的意図に基づくものであるが、これは「照れ隠し」であって、恋心があるからこそ突き放し（距離化）を行っていることは明らかである。3－3で述べたように、illocutionary forceとperlocutionary forceとは必ずしも一致しないのである。

3－4　2種類の命題敬語

命題敬語は、話者が社会的上位者として扱うべき人物、または、その人物と同等視すべき人物や物（簡便のために、これを含めて「上位者」と呼ぶ）の存在を前提として用いられる。上位者であるかどうかの判断は話者が行なうものであり、上位者ではないとわかっている人物や上位者ではあり得ないと思われる人物でも儀礼的に上位者として扱うことが珍しくない。他者指向の意図があまり感じられない場合には自己指向的意図が強く感じられ、「話者の自己防衛」「話者の品位を示す」などの含意が生まれ、相手を優位として扱うのが明らかに有標である場合には、能動的な対立的意図の存在が含意されて「あてこすり」「からかい」などの含意が生まれる。

伝統的に「尊敬語」と呼ばれてきた「主格敬語」は、主格項を上位者が占め、述語動詞は「おVになる（V=動詞連用形）」の形式、または、「おっしゃる、いらっしゃる」などの尊敬動詞となる。形容詞は「お」が付加された「お美しい、お元気だ」のような形式、「名詞＋だ」は「名詞＋でいらっしゃる」の形式を取る。

伝統的に「謙譲語」と呼ばれてきた「対格敬語」は、対格または斜格の項を上位者が占め、述語動詞は「おVする」の形式を取り、主

格は通常話者が占める。主格は話者でなくてもよいが、その場合、話者と主格の関係は上位者と主格の関係よりも近くなければならない。即ち、話者と主格人物が「ウチ」の関係になければならない。そのため、(7e) は適格であるが (7f) は不適格となる。

(7) a. 先生をお見かけした。 (上位者が対格)

b. 失礼とは思ったが、督促状を先生にお送りした。
(上位者が斜格)

c. このことだけは、私、あなたをお恨みします。
(上位者が対格)

d. 先生のお鞄をお持ちした。
(上位者の持ち物が対格)

e. 母が先生のお孫さんをお預かりした。
(母と話者はウチの関係)

*f. 弟さんが先生に写真をお見せした。
(弟さんと先生がウチの関係)

対格敬語についての一つの誤解は、対格敬語が「話者が上位者にとって恩恵となる動作をする」ことを意味するというものである。しかし、「おVする」は、上位者が当該の行為に関与すること、或いは、動作に関与する人物を上位者として扱うことを示すだけで、恩恵であるかどうかについては言及しない。上の (7a) の前に、「愛人とご一緒の」などと当該の行為が決して先生にとって有難くないことを示唆する内容を付け加えても、不適格文とはならない。(7b)、(7c) も同様に、恩恵的行為ではないことは明白である。(7d) は、「恩恵的行為を示すという機能」を提示するための代表的例文としてしばしば教科書に使われてきたもので、確かに先生は有難いと思うであろうが、それは「鞄を持つ」という行為の内容についての世間的常識が与える印象であって、この形式の持つ意味ではない。

「おVする」が「恩恵」の含意を生むのは、上位者が項とならない (8) のような場合である。

(8) a. 雑煮をおつくりした。

b．お言いつけ通り、書類をお燃やしした。

「おＶする」は上位者の関与を前提とする形式であるのに（8）では上位者は項の位置を占めていない。そこで、上位者の関与の様態が推論され、「行為の結果の受け手としての関与」という含意が生まれる。その結果の質は、世間的常識から、「被害」ではなく「恩恵」と解釈されるのである（因　1997）。

4．日本語のポジティブ・ポライトネス

4－1　ポジティブ・ポライトネスの制度化としての授受の補助動詞

日本語では、上位者や「ソト」の人物には、デフォールトとして「敬語」を用いる。これはネガティブ・ポライトネスが制度化された儀礼的使用であると見なすことができる。一方、ポジティブ・ポライトネスについては、授受の補助動詞を制度化された表現と見なすことができると考える。その理由として、まず、授受の補助動詞は対象者を「話者に恩恵を与える者」または「話者から恩恵を受けるほど話者から好かれている者」として描くことになるため、「他者からの評価と他者による受容を得たいという欲求」への対応、即ち、ポジティブ・ポライトネスとみなせる。次に、授受の補助動詞を使うことがデフォールトで使わなければ大きな違和感を生じさせる文脈がある。即ち、「依頼／指示する」「謝意を表す」という言語行為、及び、これに準ずる内容を持つ発話では、授受の補助動詞の使用が殆ど義務的と見なせる程度に近づいている。更に、制度化の齎す不可避的発展として、利益をもたらさない単なる関与を「恩恵」として描く虚礼的使用が出現している。このように、授受の補助動詞には、敬語の制度的用法と共通する特徴が見られ、ポジティ

ブ・ポライトネスが制度化された表現であると見なすことができる。

まず、「依頼する」「謝意を表す」などの言語行為において授受の補助動詞の使用が制度化されたポジティブ・ポライトネスであることを確認しよう。日本語においては、依頼・指示を行なう一般的な形は、単純な命令形でなく、授受動詞を補助動詞として付加し、その連用形「Vてください／Vないでください」の形が使われ、「ウチ」の関係のときには「ください」が省略されるが、復元は容易である。「ください」は言うまでもなく授受の補助動詞であり、相手の行動の実現を話者に対する恩恵として描いている。しかしこの形式は、完全に文法化された「依頼／指示」のマーカーではない。当該の行動の実現を「話者にとっての恩恵」と見なすことがあまりにも不自然な場合や、恩恵と見なすことによって不適切な含意が生ずる場合にはこの形は回避される。小説作品と漫画作品からの例、及び筆者の実体験に基づいた作例をあげる。

（9）（佐藤愛子『血脈』より、下線は筆者）

すべての人が心から祝福した結婚ではなかったが、二人は少しも気にしていなかった。二人は東海道から山陽を通って九州への十七日間の旅に出た。見送りに東京駅まで来た文学仲間の大島と庄司が、面白半分に品川まで同乗した。品川に着くと大島は降り、庄司は「ああ、一緒に行きたいなア」といった。「来いよ」と田畑はいい、愛子も「いらっしゃいよ」といった。それで庄司は熱海まで行き、同じ宿に一泊した。

（10）（鴨居まさね『雲の上のキスケさん』より、下線は筆者）

（眉子の祖母が悪気はないが無神経に、友人マニーの前で幼児期に眉子が受けた心の傷を暴露してしまい、眉子はひどく動揺する。眉子は衝撃を受けたことを隠そうとして明るく話し続けるが、それが却って衝撃の深さを感じさせ痛々しい。友人は全てを察し、眉子に言う）

マニー「眉子、もう、しゃべんな（＝しゃべるな）」

(11)（作例：大学院へ進学しようか親元へ帰って就職しようか迷っている学生に対して教員が背中を押す)

「あなた、やっぱ、ご両親のところへ帰り」

(9)では、新婚旅行に付いて来られることを恩恵のように見なして「来て」「来てよ」と言ったのではいくら何でも偽善的にすぎるという意識が働いて、「来いよ」と命令形が使われたのである。命令形は女性の話者には使いにくいため、「愛子」は素材敬語を用いることによって粗野な感じを消すように調整している。(10)の話者は、少々乱暴な関西弁を話す女性であるが、普段は「しゃべらんといて」「しゃべらんで」などの、授受の補助動詞を含む形式を用いている。しかし、この場合に授受の補助動詞を使い話者自身への恩恵として表現すると、「もう無理してしゃべらなくてもいい」と相手を思う気持ちでなく、「迷惑だから私のために話を止めてくれ」という含意が生まれる。直截な命令形にはこのような含意は生まれない。(11)でも同様に、「帰って」と授受の補助動詞を含意する形式を使えば、「大学院に来られるのは困る」と教員が考えているという含意が生じかねないため、使用が回避されている。尚、筆者の方言では、動詞連用形を「お」などを付けずに命令形として使うことができる。(9－11)が示すように、依頼における授受の補助動詞の使用は殆ど形骸化しているように見えるが、いくらかは実質的な意味を保持している。(10)、(11)は、制度的使用は話者指向的にも他者指向的にも解釈できるという事実を思い出させる。

「謝意を示す」発話、または、当然感謝の気持を感じてなされるべき発話では、授受の補助動詞の使用は義務的である。(12)(13)のような文は、敬語を正しく用いているにも関わらず、授受の補助動詞が使われていないため、大きな違和感を与える。(13)は謝意を表すための発話ではないが、「先生の論文を読む」という行為には感謝を感じるべきであると考えるのは、日本の伝統的価値観の反映と言えるであろう。

(12) ＊a. 先日お送りになったお菓子、おいしく頂きました。
＊b. 差し上げた本をお読みになれば光栄に思います。
＊c. 日本語をお教えになって、ありがとうございました。

(13) ＊先生の論文をお読みしました。 (因・金 2005)

いずれも、授受の補助動詞を付加すると適格になる。

(14) a. 先日送ってくださったお菓子、おいしく頂きました。
b. 差し上げた本を読んでくだされば光栄に思います。
c. 日本語をお教えくださって、ありがとうございました。

(15) 先生の論文を読ませていただきました。

(12) の例文は韓国人学習者の誤用の例である。韓国人学習者は、こうした誤用をよくおかすだけでなく、これらが誤用であると認識することが難しい（因・金 2005）。「感謝」を表す文脈では「地位の上下」の認識を示すだけでは不十分で、「依頼」におけると同様に、あるいはそれ以上に、「恩恵」を表示することが必須であるという事実を教育の場で明示することが必要であると思われる。

制度化は不可避的に実質の伴わない儀礼的用法（虚礼）の出現に結びつくが、下の（16a－d）のように、相手の行動が話者への恩恵であるとは考えにくい発話に授受の補助動詞が付加される例が出現している。付加しなければ違和感があるというわけではないが、好んでこれを使う傾向は、特に商業的な場面で強くなっているようである。（16c）は、発話者は刑事が客に尋問することを遮ろうとしているのであるから、実はその行為を迷惑に感じている筈なのに、儀礼的に恩恵として表現している。（16d）も同様である。しかし、（16e）のように話者の関与を儀礼的にも想定し難い事柄に関しては、授受の補助動詞を使用することができない。

(16) a. 29番のバスにお乗りくだされば、駅まではすぐです。
b. 自宅の電話番号は個人情報ですので、お聞き頂いてもお教えできません。
c. (泊り客に職務質問をしようとする刑事にホテル従業員

が）お客様にあまり長時間聞いていただきますと、お疲れになりますので・・・

d. 不可能なことを言ってくれても、どうしようもないんだよねえ。

＊e. 先生は、何年に大学にお入りくださったのですか？

最近目に付く「させていただく」の多用という現象も、こうした儀礼に基づく用法の一つと考えられるだろう。下の（17b）は筆者には違和感があり「お詫びいたします」の方が好ましく思われるが、「このほど世間をお騒がせ致しまして」に続けて用いられる例を、ニュースでたびたび耳にする。

(17) a. ただ今から例会を始めさせていただきます。

b. 心から、お詫びさせていただきます。

以上に見たように、「他者から自分に及ぶ行為」については、実質的に恩恵でない場合にも授受の補助動詞が使われるまでになっており、制度的使用が確立していると考えられる。一方、「自分から他者に及ぶ恩恵」については、これを表示することがポジティブ・ポライトネスとして機能するのは話者が対象より上位者である場合に限られるようである。

(18) a. （子供に）「りんごジュースをつくってあげようか？」

＊b. （先生に）「コーヒーを淹れて差し上げましょうか？」

c. （先生に）「コーヒーをお淹れしましょうか？」

(18) が示すように、話者が相手よりも上位者である場合は、「～てあげる」は「あなたが好ましいのでその要求に応えたい」という話者の気持を示し、相手へのポジティブ・ポライトネスとして機能するが、逆に相手が話者より上位者の場合には、「相手のために私がよいことをする」という恩着せがましい印象を与える危険を回避することがより重視されるため、「て差し上げる」の使用は抑制され、恩恵を表示せず上下関係の認識のみを表示する（18c）が適格となる。しかしながら、この抑制は直接相手に言うのではなく、

事態を描写する場合には緩む。 (19) では、授受の補助動詞が (18 a) におけると同様に話者の相手への好意を強調し、相手を「好意を寄せられる存在」として描くというポジティブ・ポライトネスとして機能している。

(19) 先生のお好きなコーヒーを淹れて差し上げると、大層お喜びになった。

上の観察から、「～てあげる／～てさしあげる」も対象指向的な面と自己指向的な面を含んでおり、「恩恵を捧げられる相手」という面が優位に解釈される文脈的要因があれば問題なくポジティブ・ポライトネスとして働くが、「恩恵を施す話者」という面が優位に解釈されれば恩着せがましいという不適切な含意が生まれるのであるということがわかる。上位者に対面で話す場合には不適切な含意が生まれるのを避けるために「てさしあげる」の使用が抑制されるのである。

「～てあげる」にも制度的用法の必然的発展である虚礼的用法の例が出現している。この用法の特徴は、聞き手が潜在的主語と設定されていることである。 (20a－b) は、厳密に考えれば「恩恵」の受け手の存在しない奇妙な用法なのであるが、対話の相手の行動を恩恵授与であるかのように描くことが、ポジティブ・ポライトネスとなると見なされているのであろう。

(20) a. カーブのところは細かい針目でかがってあげると、きれいに仕上がります。 (NHK「おしゃれ工房」の中で)

b. 毛先だけ軽くパーマをかけてあげると、印象がずいぶん明るくなりますよ。

4－2 言語装置によるポジティブ・ポライトネス実現の諸相

ポジティブ・ポライトネスは、「他者に評価されたい、認められたい、好かれたい」という欲求への対応であり、「対象のよい面に言及する」、「対象への親近感を示す」などは、ポジティブ・ポラ

イトネスの実現に寄与する原則である。これらが「誉める」「冗談を言う」などの内容の操作に関わる手段によって実現されることはいろいろな言語によく見られることであり、日本語もその例外ではない。日本語には更に、授受の補助動詞など、これらの原則の実現に関わる種々の言語装置があり、これを操作することによってポジティブ・ポライトネスが実現されることが特徴的であると言えよう。

3－2で既に述べたが、敬語も、ネガティブ・ポライトネスの実現だけに関与するのではなく、ポジティブ・ポライトネスにも関わる。丁寧体の使用は「対象との距離化」となってネガティブ・ポライトネスを実現するが、その裏返しに、丁寧体を用いないことや回避することは、親和的意図が前提される場合には「対象との近接化」と解釈されポジティブ・ポライトネスとして機能する。丁寧体・普通体の選択の自由は、よく知られているように、上位者のみにある。上位者は下位者に対して、しばしば「近接化」のための手段として普通体使用（＝丁寧体の不使用）を選択する。一方下位者は、上位者が接近してきたときにはこれに応じて自分からも接近することが望ましいが、下位者に使用できる対者敬語操作は「丁寧体使用の回避」までであって、普通体使用は許されない。そこで、主節の省略、擬似独言などの方法をその他の手段と組み合わせて「近接化」を行なう（松村・因 2000）。 つまり、上位者は、「対者敬語不使用」を「先に」行なうことができ、下位者は、「対者敬語回避」を「上位者の近接に応えて」行なうという非対称が存在する。

さらに、日本語では、ジェンダー表現など文体的特徴の操作によってポジティブ・ポライトネスを実現することがある。因（2003、2004a）では、女性が男性の言葉を使うなど、話者の人格とはかけ離れた人物のような話し方をする「他人格モード」の機能について報告した。他人格モードは、簡単に言えば文体による冗談で、内容は話者の本音そのものでありながら自己韜晦でもあるような話し方である

(主張を留保するという点ではネガティブ・ポライトネスと見なせる側面も持つ)。また、因 (2005b) では、男性が相手の女性に同調して男性語の使用を抑制したり女性的中性語を使用したりする例について報告した。このような同調も、「近接化」というポジティブ・ポライトネスであると考えられる。

5. 日本語のポライトネスの特徴

本節では、日本語の文法的言語装置によって実現されるポライトネスの特徴を整理し、日本語教育への示唆について考えたい。

まず、敬語をはじめとして、ポライトネスに関わる言語装置の使用の「制度的側面 (=社会的に制御される、儀礼としての用法)」と「語用論的側面 (=話者の能動的意図によって選択される用法)」とは截然と区別されているわけではなく、制度的用法にも文脈に即して解釈されるべき余地があり、語用論的用法に連続しているとみることができる。敬語を持つ言語は日本語だけではなく、例えば韓国語も上位者に対して用いる形式と同等者・下位者に用いる形式の区別があるが、社会的要因による制御が日本語よりもずっと厳しく、話者の選択に任される余地が少ない。従って、文脈における効果は日本語におけるよりも一定している。

次に、人間関係の深化が制度的使用を消失させないことも特徴であると言える。制度化された用法による社会的位置の認識の表示は、表示が可能な箇所において必ず行なわなければならないというわけではないが、人間関係が親密になっても、使用頻度は減少するものの消失はせず基本的な形式も変わらない。松村・因 (2000) では、会話における対者敬語の使用を観察したが、社会的地位に差のある二人の間の会話において、社会的要因によって使用が促される

形式（丁寧体の「使用」）と話者の親密化への意図が反映された形式（上位者による丁寧体「不使用」と「回避」、下位者による「回避」）とがダイナミックに交替している実態が観察された。上位者に対しても距離化が一辺倒に行なわれるのではないが、一方、相手との関係が深くなっても、当初の位置関係に基づいた距離化が要所、要所で行なわれる。即ち、脱距離化による親密化への努力が頻繁に行なわれている中で、対立的意図がないのに再び距離化が行なわれるのである。この現象はしばしば学習者を混乱させる。こうした現象についての理解を促すには、「距離化」は「場」に対する認識によっても行なわれること、また、「脱距離化」が意図的な失礼や品格の欠如に基づく「領域侵犯」ではなく「親密化への努力」と解釈されるためには、「距離化」を要所要所できちんと行なって話者の基本的な姿勢を示すことが必須条件であること（「けじめ」の必要性）を、教育の場で十分に提示することが必要である。

更に、日本語のポライトネスの特徴として、制度化への志向性を指摘できる。ネガティブ・ポライトネスに関して、敬語という、その使用が制度化された体系を持つだけでなく、４節において指摘したように、ポジティブ・ポライトネスに関しても制度化された言語使用が見られる。

また、ポライトネスに関わる言語装置が多く存在することも日本語の特徴であろう。敬語や授受の補助動詞以外にも、「のだ」などepistemicな認識に関わる文末表現もポライトネスに関与する。また、話者のジェンダーや年齢など個人的特徴を示す形式も、「他人格モード（文体による冗談）」を生み出すなどポライトネスに関わる現象を生じさせる。言語的装置による操作の可能性が大きいことが日本語の特徴と言えるであろう。

6．日本語教育への示唆

日本語のポライトネスの特徴を簡単にまとめれば、敬語を始めポライトネスに関わる言語装置が多く存在し、その操作には社会的要因と話者の能動的意図の両者が影響することである。このことは、ある言語装置の操作が文脈の中で発揮し得る効果が多彩であるということを意味するが、一方、内容については、個性的・積極的であろうとするよりも常識的・防衛的であろうとする傾向の強さと結びつくかもしれない。筆者は韓国人学習者の観察から、「挨拶、世辞、冗談」など社交上の言辞として許容される内容の範囲が日本語は韓国語よりも狭いのではないかという直感を持っているが（因　2002）、それを検証するのは今後の課題である。

日本語教育においては、語用論的運用力を十分に訓練する方法はまだ十分に開発されているとは言えない。殆どの場合、学習の負担を軽減するためとはいえ、言語装置の典型的な具体的効果を示し、パターン化された言い回しを用いて特定の言語行為を「無難に行なう」練習、多くの場合は応用的模倣練習を行なわせるに留まっている。しかしそれでは、学習者はその装置が産生し得る効果の幅に気づかない。「無難な例」「丁寧な例」だけでなく「失礼な例」「対立的な例」も提示し、そうした効果を十分に感知できるだけの解釈力を涵養しなければならない。語用論的効果は、事実のあり方との対比によって妥当性を学習者が自ら検証できるような性質のものではないため、母語との接触経験によって自然に解釈力が向上するとは限らず、かなりの流暢さを獲得した上級学習者が、感情的反発につながる誤解をそのまま保持していたり、意図しない反発を招いたりしている可能性は少なくないのである(因 2002、2004b、2005a)。

語用論的現象に対する解釈力を涵養する教育方法を開発するには、種々の言語装置の基本的概念とそれが文脈の中で発揮する効果を区別して、基本概念が効果を発揮する機序を明らかにすることが

基盤となる。その上で、効果が無秩序に生み出されるのではなく、基本的概念が一定の常識的論理によって解釈されて成立することを学習者に明示できる教材と教授法を開発しなければならない。語用論的理解力を涵養する教育方法は、①言語装置の基本的な概念（意味）と効果産生に関わる原則の明示、②豊富な具体例の提供、③効果とその産生機序を観察し分析する具体的作業の提供を含むことが必要であろう。

< 参考文献 >

井出祥子 (1987) 「現代の敬語理論－日本と欧米の包括へ」『月間言語』第16巻8号、大修館書店、26－31ページ。

井出祥子 (2001) 「国際化社会の中の敬意表現－その国際性と文化独自性」『日本語学』第20巻 4号、4－13ページ。

宇佐美まゆみ (2001a) 「『ディスコース・ポライトネス』という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること」『語学研究所論集』第6号、東京外国語大学語学研究所、1－29ページ。

宇佐美まゆみ (2001b) 「ポライトネス理論から見た<敬意表現>－どこが根本的に異なるか」『月間言語』第30巻12号、大修館書店、18－25ページ。

宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開」1～12、『大修館書店』第31巻1号、5号、7号、13号 (2002年1－12月号連載) 、大修館書店。

滝浦真人 (2005) 『日本語の敬語論－ポライトネス理論からの再検討』大修館書店

因京子 (1977) 「『おVする』の文法」ハバート・坂本・デーヴィス (編) 『日本語教育：異文化への懸け橋』117－30ページ、アルク。

因京子 (2002) 『留学生のためのちょっと気の張る手紙の書き方』ビーエフエスアール。

因京子 (2003) 「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語ジェンダー学会』第3号、日本語ジェンダー学会、17－36ページ

因京子 (2004a) 「ジェンダー表現の機能」『言葉のからくり：河上誓作教授退官記念論文集』英宝社、773－85ページ。

因京子 (2004b) 「マンガ読解に見る韓国人学習者の会話理解」『韓日言語文化研究』、5号、韓日言語文化研究会、63－88ページ。

因京子・金瑞賢 (2004) 「韓国人学習者の敬意表現に関する認識につい

て」『韓日言語文化研究』、5号、韓日言語文化研究会、103－34ページ。

因京子（2005a）「日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点－日本語学習者によるマンガ理解を通して－」『比較社会文化』第11巻、九州大学比較社会文化研究院、83－92ページ。

因京子（2005b）「女性語のゆくえ：絆として鎧としての女性語の可能性」『言語文化叢書XV巻：言語と文化のジェンダー』九州大学言語文化研究院、30－45ページ。

松村瑞子・因京子（2000）『日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』平成10年度－12年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究課題番号10680309、研究成果報告書

松村瑞子（1999）「日本語会話におけるポライトネス－Brown& Levinson（1987）の妥当性を中心に－」『言語科学』34号 九州大学言語文化研究院

メイナード泉子K.（2001）『恋するふたりの「感情ことば」－ドラマの分析と日本語論』くろしお出版

Austin, J.L. 1962. How to do things with words. Harvard Univ. William James Lectures 1955. Oxford.

Brown, Penelope and Steven C. Levinson. 1987. Politeness: Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge University Press

Chinami, K. 1989. An analysis of the meaning and usages of the S + No Desu construction. 『英語学の視点』九州大学出版 312-52.

Grice, H.P. 1975. Logic and conversation. In Cole and Morgan, eds. Syntax and Semantics, vol.3: Speech acts: New York: Academic Press. 41-58.

Ide, S. 1989. Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistic politeness. Multiligua, 8:223-248

Harada, S.I. 1976. Honorifics. In M. Shibatani ed. Syntax and Semantics, vol.5: Japanese Generative Grammar. New York: Academic Press.

499-561.

Leech, Geoffrey. 1983. Principles of Pragmatics. London: Longman.

Matsumoto, Yoshiko. 1988. Reexamination of the Universality of Face: Politeness in Japanese. Journal of Pragmatics 12:403-26

Matsumura, Y., K. Chinami and S J. Kim 2004. A Contrastive Study of Japanese and Korean Politeness: A discourse based Analysis. At Conference of Linguistic Politeness and Gender. University of Helsinki. Finland, September 3, 2004.

Searle, J. R. 1976. Indirect speech acts. In Cole and Morgan, eds. Syntax and Semantics, vol. 3:Speech acts: New York: Academic Press. 59-82

例文の出典

逢坂みえこ (1999) 「火消し屋小町」①小学館

北川悦吏子 (1996) 「ロングバケーション」 (テレビドラマ)

佐藤愛子 (2005) 『血脈』下、文集文庫、文芸春秋

鴨居まさね (2000) 『雲の上のキスケさん』④ヤングユーコミックス、集英社

山岸涼子(1997)『私の人形はよい人形』文集文庫、文芸春秋

Linguistic Politeness in Japanese: the institutionalized use and the pragmatic use

Kyoko CHINAMI

Keywords:positive/negativepoliteness, institutionalized/pragmatic use, keigo, verbs of giving and receiving as auxiliary, speaker-oriented /honored-oriented, friendly intention/antagonistic intention

This paper is an effort to describe the quality oflinguistic politeness in Japanese: how the institutionalized aspect and the pragmatic aspect are interwoven, and how the negative face and the positive face are dealt with. The Japanese language is equipped with a lot of linguistic devices that contribute to the realization of politeness, among which keigo, the honorific language, is the most conspicuous, though not the only. The basic function of keigo is to put a deferential distance between the speaker and the honored; keigo is considered to be the socially institutionalized measure to realize negative politeness. The author claims that Japanese has a socially institutionalized measure also for the positive politeness, i.e. the use of verbs of giving and receiving as an auxiliary; the positive face is tended to by that measure almost as regulatedly as the negative face by keigo. The dependence on the institutionalized measures is the most significant characteristic of politeness in Japanese, but the institutionalized use may be oriented either to the speaker (self-defense) or to the honored

(deference). Also, the linguistic devices can be employed to serve for the speaker's active intention to convey a variety of meanings. Even the use of keigo can be operated to tend to the positive face. Thus, the actual effect of a specific use of a linguistic device is far from fixed, and should be pragmatically interpreted based on the knowledge of the basic function of the device and the general principles of human linguistic behaviors as well as the inference as to whether the speaker's intention is friendly or antagonistic on one hand, and whether it is the honored-oriented or the speaker-oriented on the other.